

Athena Sources in Children's Literature



Magasin d'Éducation et de Récréation

エッツェル『教育娯楽雑誌』

別冊解説 石澤 小枝子(梅花女子大学名誉教授)
私市 保彦(武蔵大学名誉教授)



Jean Macé



Pierre-Jules Hetzel



Jules Verne

教育者マセ、「SFの父」ヴェルヌも参加した、
名編集者エッツェルの19世紀フランス児童雑誌を復刻

Athena Press

「教育娯楽雑誌」の復刻版の刊行

私市 保彦 武蔵大学名誉教授

出版史、児童文学史で画期的な歴史を刻んだ「教育娯楽雑誌」の復刻版が、フランス本国でなく日本で刊行されると聞いて、この雑誌の特徴と価値を知っている人なら、だれしも驚きをおぼせまいだろう。

「教育娯楽雑誌」は、19世紀の代表的な編集者であるピエール＝ジュール・エツェルによって、1864年に発刊された。当時、フランスでは児童図書の出版が開花し、児童向けの雑誌も続々と発刊されていた。そのなかで、エツェルが満を持して発刊したのが「教育娯楽雑誌」であった。バルザックやユゴーなど、ロマン派の巨匠たちの編集ばかりか児童文学の分野にも進出して、すでに多くの児童図書の刊行を手がけていたエツェルの抱負はきわめて明確であった。雑誌のタイトルに示されているように、それは「教育」と「娯楽」を融合することにあつた。「教育的なもの、興味を刺激する形でなされねばならない。さもないと、教育臭で反感や嫌悪感をひきおこすことになる。面白い話のなかに教育的で有用な事実がかくされていなければならない。さもないと、面白い話は中味に欠け、頭を満たすかわりに空っぽにしてしまうだろう」と、エツェルは創刊号の巻頭の言で読者に呼びかけている。また、幼少期から成人までの知的要求にこたえるつもりだとして、親子がともに家庭で読む情景を想定している。

当時、子どもに読ませる物語にはあいかわらず押しつけ的な教育調があつたりする一方、中味のない興味本位の読み物も見られた。そうした状況から抜けだして、「教育」を「娯楽」と一体とし、広い読者層を獲得しようという高い志と野心が、ここには見られる。果たせるかな、「教育娯楽雑誌」は、きわめてスケールの大きな雑誌になって羽ばたいていった。そして、創刊号が1864年3月20日に刊行されるや、アシェット社などのライヴァル社の雑誌はたちまち色あせることとなった。月2回刊行の各号の価格が50サンチーム、年間予約がパリで12フラン、地方で14フランと、廉価版の子ども雑誌のほぼ10倍の値段であつたが、上質の紙に活字を組み、挿絵をふんだんに載せて構成されていた。面白い物語、血湧き肉躍る科学冒険小説、博物学者・科学者による啓蒙的な記事、古今の古典からの抜粋、ルードルフ・ウィース、オールコット、アンデルセン等々の外国の物語の紹介、教訓的なコラムなどが満載され、フランスの代表的な児童雑誌として君臨することになる。

それには、共同刊行者として名をつらねた科学読み物の大家ジャン・マセや、「SFの父」といわれている科学冒険小説のジュール・ヴェルヌの存在が欠かせなかった。というのは、雑誌は、科学読み物とフィクションという二本立てで構成されていたからである。

エツェルが共同刊行者にえらんだジャン・マセは、すでにエツェル書店で刊行された『一口のパンの話』という、少女に手紙の形で内臓の働きについて語るという科学物語で、大評判になった作家であるが、子どもを惹きつける興味いっばいの筋書で有益な知識をあたえるというその手法を、エツェルは存分に生かした。

「SFの父」と後年呼ばれることになるヴェルヌの才能をエツェルが発掘したことは有名な逸話であるが、エツェルは、そのヴェルヌの科学冒険小説の連載を雑誌の柱にした。そのため、ほとんどのヴェルヌの小説はまずこの雑誌で連載され、あとで単行本として刊行されるというプロセスをたどることになった。ヴェルヌは、いわば雑誌の大きな目玉だった。近年、ヴェルヌの小説のテキスト成立の研究が進みはじめているが、その意味では、時間的には初出となる「教育娯楽雑誌」のテキストの分析は、ヴェルヌ研究には欠かせない。

他方、スタールという筆名で児童文学作家として多数の物語を残したエツェル自身の作品、ジュール・サンドー、アンドレ・ローリーをはじめとする人気作家の読み物も話題を呼びつづけた。挿絵にはとりわけ力が入られ、ギュスターヴ・ドレ、グランヴィル、ペルタール、ジグー、ガヴァルニ、ジョアノなどの代表的な画家ばかりでなく、子どもを生き生きと描く挿絵画家フロモンやフロリッヒなども起用された。すでにエツェルは、グランヴィルの『動物の私的公的生活情景』、および『パリの悪魔』という二大戯文集で挿絵を読み物の主役に押し上げるという快挙を成し遂げていたが、「教育娯楽雑誌」も挿絵を眺めるだけで楽しいという雑誌であり、日本ではほとんど知られていない当時の児童文学の挿絵の特徴とその展開をたどるためにも、この雑誌は重要な資料になる。

エツェルは、1848年の二月革命では外務省官房長官として臨時政府を支えたが、そのため第二帝政期にはベルギーに亡命するという辛酸をなめている。また、雑誌刊行中におこったパリコミュンや、アルザス・ローヌの割譲という事態は、雑誌の継続に大打撃をあたえた。このような変転のなかで、エツェルは筋金入りの共和主義者でありつづけ、ヒューマニズムの立場を守りつづけたが、そのエツェルが、「教育娯楽雑誌」の読者を健全なブルジョア層に定め、高い志をもって、多彩な人脈から執筆者を起用し、フランスの未来を託した子どもたちに新時代の知識とモラルをあたえようとした跡は、雑誌の全編にあふれている。その軌跡をこの雑誌を通して読みとることも、フランスの児童文化史・社会史の観点から重要な仕事であろう。このように「教育娯楽雑誌」の特徴をたどると、これが日本で復刻される快挙は、やはり驚きというほかない。

エッツェルの「発明」

鹿島 茂 明治大学教授

制度やシステムの発明・発見に関する歴史、すなわち「ヒストリー・オブ・アイデアズ」というのは、私が強い関心を寄せるところですが、児童文学およびSF・アドベンチャーというサブカルもまた、意外なことに、発明・発見の歴史に属するのです。つまり、大昔から存在していたものでは決してなく、歴史のある時期に、ある人物によって発明された「制度」なのです。

その人物とは、バルザックやユゴーの出版人にして奇才グランヴィルの天才を広く世に知らしめたピエール＝ジュール・エッツェルです。もし、エッツェルが1864年に「教育娯楽雑誌」を創刊し、そこでジュール・ヴェルヌという新人を大抜擢しなかったら、果たして、今日、我々がイメージするような児童文学・サブカルが誕生したかどうか知りません。

もちろん、「教育娯楽雑誌」がこの手のジャンルの雑誌の嚆矢ではありません。18世紀の末から子どもを主な読者層とする雑誌や週刊新聞の類いはたくさん創刊されていました。しかし、それらはおしなべて、子どもを倫理をわきまえた大人にするための道徳教育を、物語や御伽草子の力を借りて行うという特徴を持っていました。しかし、目的が露骨だったため、敏感に道徳臭を察知する子どもはこの手の徳育雑誌を好むことはありませんでした。

では、エッツェルは、徳育に代えて何を置いたのでしょうか？

それは後にアメリカでディズニーが映像で展開することになる「空想と冒険」という「もう一つの世界」です。とりわけ、ジュール・ヴェルヌによってこの「もう一つの世界」を得たことにより、エッツェルの「教育娯楽雑誌」は、たんに児童文学という領域を超え、サブカルという

大人も読むジャンルへと離陸したのです。

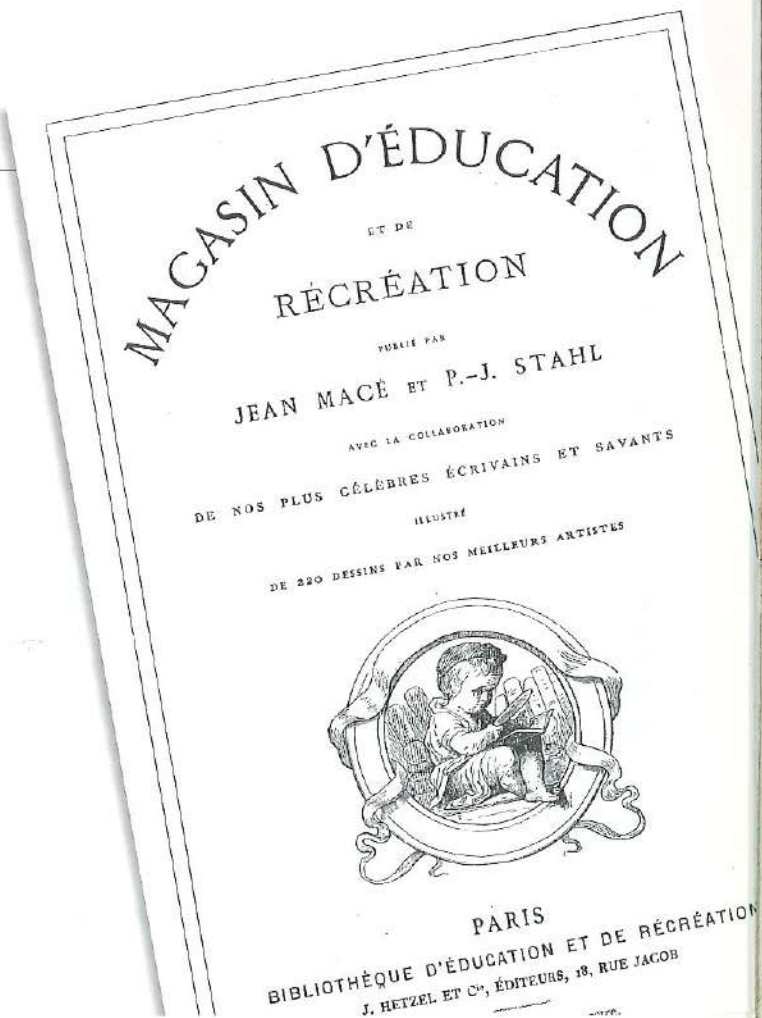
とはいえ、「教育娯楽雑誌」は「徳育」を完全に放棄したわけではありませんでした。むしろ、「徳育」を新しいかたちの教育に変えようとつとめました。それは、共和国の市民として、新しい国家と社会を作っていく子どもを育てることです。

こちらの方面で活躍したのが、「家なき子」で知られるエクトール・マロです。

エクトール・マロは、社会の底辺に忘れられた子どもたちを取り上げ、彼らが周囲の貧困と悪徳にもかかわらず、創意工夫とたくましい生活の知恵でサバイバルし、ついには周囲の大人たちを説得して、社会改良に参加させるような物語を多く書きました。

ひとことでいえば、エクトール・マロが「教育」を担当していたのに対し、ジュール・ヴェルヌは「娯楽」を引き受けていたといえなくもないのです。「教育」と「娯楽」が両輪として働いて初めて健全な共和国市民を育てることができるとというのが、筋金入りの共和主義者エッツェルの信念だったようです。

このたび「教育娯楽雑誌」が日本で復刻されると聞きました。これによって、児童文学とサブカルの前祖ピエール＝ジュール・エッツェルの全貌があらわになることを切に期待しています。



「教育娯楽雑誌」復刻の快拳

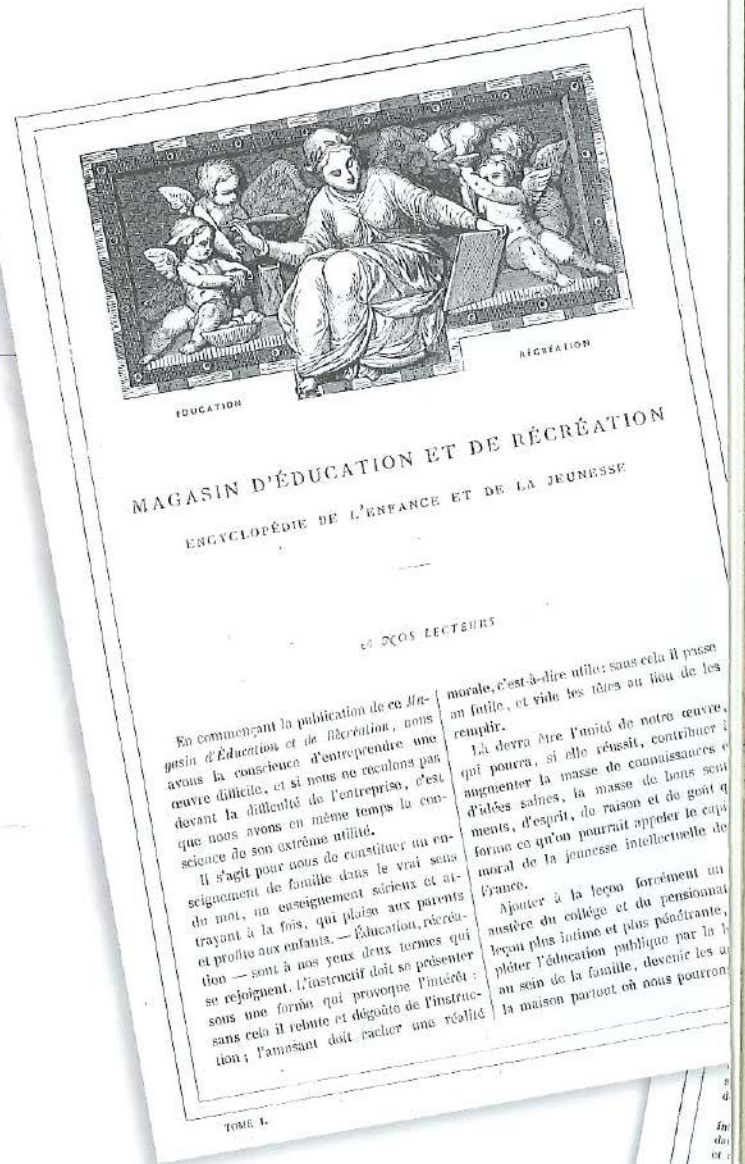
柏木 隆雄 放送大学大阪学習センター所長

先に「パリの悪魔」二巻が復刻されて、19世紀後半の出版技術や当時の風俗、文学、芸術のありようを、つぶさに今日の読者に知らしめることになったが、とりわけこの本を企画、編集したピエール=ジュール・エツェル、筆名、スタールの仕事の大きさを、その別冊解説の説くところとともに、精細な図版やエスプリの効いた記事で確かめた人も多かっただろう。復刻版が出てまもなく、昨年私市保彦先生が「名編集者エツェルと巨匠たち フランス文学秘史」を著されて、エツェルの仕事の全貌が、その時代背景やバルザック、ユゴーといった大物作家との交渉など、従来必ずしも十全にとらえられることの少なかった文学史的視野のもとに、日本の読書家に明らかにされるに至って、ますますエツェルの存在を重からしめることになった。

しかしその評伝の中でも特筆されているように、いわゆる「驚異の旅」シリーズで今も人気の高いジュール・ヴェルヌの発見、育成は、編集者エツェルの眼識、知見の高さを示すものだが、彼の活躍する場としての「教育娯楽雑誌」の発案は、ヴェルヌの発見以上に彼の優れて深い洞察力と未来への高い志向からなるものだ。すなわち年少の読者に良質の読み物を提供し、訓育すると同時に将来の見識ある大人の読者層の獲得。折からの児童教育の普及を図ろうとする政府の姿勢とも相まって、エツェルは義務教育の普及に尽力していた教師、そして同窓でもあったジャン・マセと出会うことにより、児童を読者層とする挿絵入りの雑誌を刊行する。そのタイトル、*Magasin d'Éducation et de Récréation, Journal de toute la Famille* は、付け得て妙、と言うべきで、「教育」*éducation* はともかく、「娯楽」とした *récréation* は、学校の休憩時間のことをも言うから、教室でも休み時

間にも細く雑誌という意味にもなり、また *ré-creation* 「再創造」とも取られて、新しい人格形成に役立つことをも示唆する。そして先駆的な児童雑誌の「子どもの友」や「令嬢雑誌」といった特定の読者ではなく、*Journal de toute la Famille* 「家族みんなの雑誌」としたところに、編者の基本的な姿勢と戦略が見える。

今回優れた評伝を書かれた私市先生、長年児童文学を考究され、本雑誌の全巻の作者・挿絵画家索引なども作られた石澤小枝子先生の解説を付して復刻がなされるのは何という快拳だろう。読者はヴェルヌの「海底二万マイル」、『十五少年漂流記』など「驚異の旅」の多くのプレオリジナルを見ることが出来るほか、「学校のピエロ」等に見る当時の児童、小学校の有様を挿絵や説明で見て取って、今日における児童教育への示唆を得ることも可能である。そのふんだんな挿絵と明快な文章は、19世紀フランスの出版文化の一つの優れた模範例として、日常折に触れて頁を繰りたいものだ。



19世紀フランスでは子どもに何を読ませようとしたのか

—— 第一級史料の復刻刊行に寄せて ——

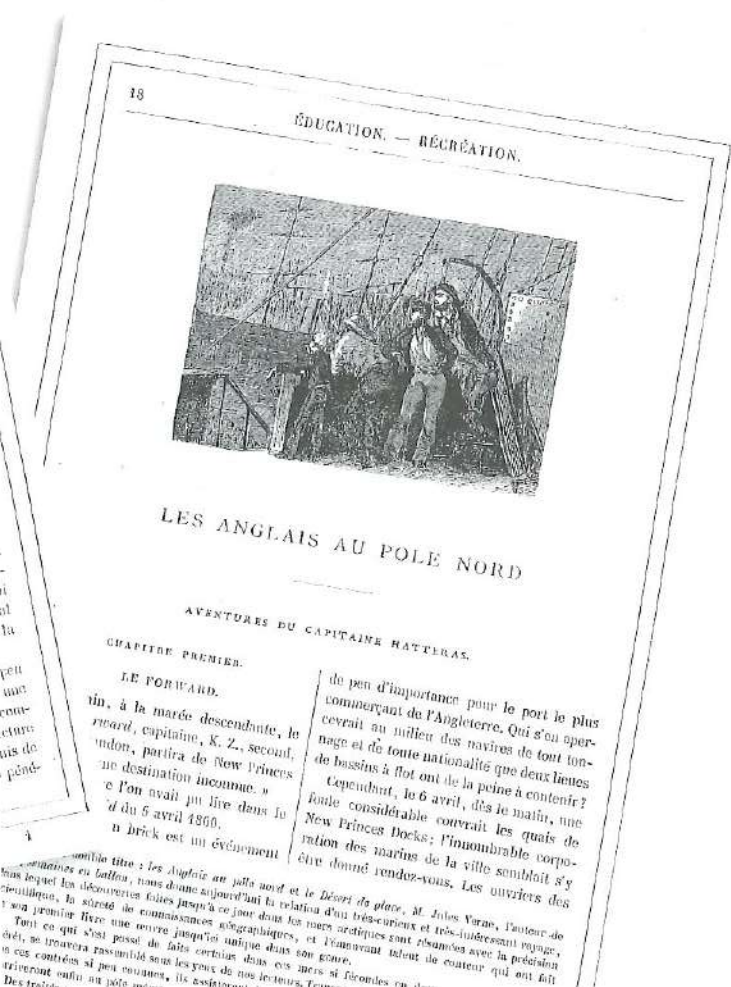
福井 憲彦 学習院大学学長

フランスをはじめ19世紀のヨーロッパは、じつに多様な定期刊行物を生み出したことで知られている。学校教育の普及が図られたこともあり、字を読み書きできる人の数が増え、知識への欲望といったものも広く刺激されはじめた時代である。それに、活版印刷技術の機械化や紙の生産の工業化といった、技術上の一大変化が、本や雑誌、新聞など文字情報のあり方を大きく変化させた時代でもあった。そうした定期刊行物のうちには、三号雑誌ではないが泡のようにたちまち廃刊されてしまうものもあったけれども、しっかりした準備で開始され、粘り強く継続されたものもあった。今回、アティーナ・プレスの英断で、復刻刊行されることになったこのマガジンは、その後者に属するものであり、いろいろな観点から興味深い内容を提供してくれる。現在ではマイクロフィッシュやマイクロフィルムで取り寄せて利用するという手段もあるにはあるが、現物ないしその復刻版を直接利用できるに越したことはない。

1864年に創刊されたこの雑誌は、そのタイトルから想像できるように、教育と楽しみとを併せもつことを売りにしている。創刊号巻頭の「わが読者たちへ」というマニフェストからは、刊行の意図が、楽しみながら勉強になる、児童や若者たちにそういう適切な読み物を提供する、ということにあったことが分かる。子どもたちが家でくつろいで面白が

って読むうちに、学校での教育を補完する役割も果たせるだろう、と。18世紀に社会の上層部からはじまった子どもへの読書の勧め、いわゆる児童書の普及の動きは、19世紀にもなると大きく裾野を広げるようになった。この雑誌は、子どもの歴史や教育史という点できわめて重要な位置を占めるものである。

創刊の編者としてジャン・マセとP.-J. スタールの名が挙がり、ピエール=ジュール・エツェルが出版。エツェルといえば、バルザックやユゴーなどの挿絵入りの小説を刊行ヒットさせたことで知られているが、ジュール・ヴェルヌを売り出したことでも有名である。じっさいヴェルヌはこの雑誌でも重要な寄稿者の一人であり、のちには編者としても加わっている。マセは、この雑誌刊行と並行してフランス教育連盟を組織して、教育を国民全員に普及させることに邁進した教育者であった。もう一人のスタールは、フランスで出されている人物事典よるとエツェルのペンネームだそうである。この二人は、パリにあるコレージュ・スタニスラスという寄宿学校で学んだときからすでに知り合っており、書物の普及と民衆教育への情熱とを共有することで、この子どもと若者向けの雑誌を刊行する企てを実現したのであった。教育部門の内容をマセが担当し、娯楽的な読み物の部分をスタール、つまりエツェルが担当した。庶民の興味をひきつけられるように挿絵が配され、庶民の手が届くように厚紙の装丁で価格を抑えたエツェル社の書物や雑誌は、その独特の装丁や挿絵によって、現在ではパリの古本屋でたいへん高い値がつく人気である。この雑誌もまた随所に、ドレなどによる版画が挿入されていて、図像という点でも興味深い資料的価値をもつだろう。



近代の「子どもの情景」が時系列で立ち現れる

宮下 志朗 東京大学教授

19世紀の文学や思想を研究している人は羨ましいなど、ときどき思ったりする。新聞・雑誌というメディアが発展をとげて、そうした媒体に「記入」された、さまざまなエクリチュールを読んだり、あるいは挿絵を眺めたりしながら、その時代を追体験することができるのだから。わたしの専門の16世紀に関しては、残念ながら、そのような特権的な時間を生きることは不可能に近い。

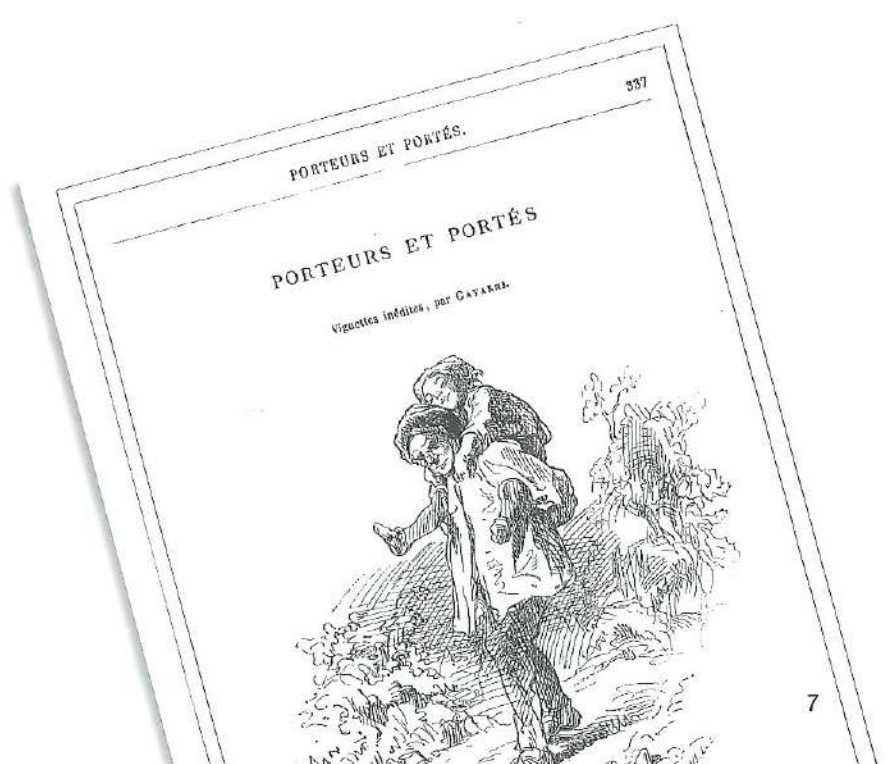
その19世紀後半から20世紀初めにかけての、「子どもの情景」が時系列で立ち現れてくる媒体——それが《教育娯楽雑誌》にほかならない。そう、あの『海底二万里』や『二年間の休暇』が連載された雑誌である。ヴェルヌの多くの作品は、この雑誌媒体を経て、同名の叢書——赤いハードカバーは、愛書家にはおなじみだ——として発売されたのである。大編集者ビエール=ジュール・エツェルと、子どもの読書指導や図書館活動などに燃える教師のジャン・マセという、リセの同級生が創刊したこの雑誌は、そのタイトルが物語のごとく、「教育する」と同時に「楽しませる」という、理想を追求したものであった(月二回の発売で、価格はパリで0.50フラン)。創刊の辞でも、「まじめで、魅力的な教育」の重要性が強調されていて、将来を担う子どもたちに、いわば健全な娯楽を提供したいのだという意図が表明されている。

毎号の表紙を飾った図版を見てみよう。櫛比する本の前に座った小さな子どもが、読書している。なにを読んでいるのだろうか？ この子ども、童顔のくせに、ずいぶんとませている。眼鏡をかけて、右手にはペーパーナイフまで持っているではないか。子どもが、大人の予備軍として位置づけられてきたことが、フランスにおける子ども文

化や児童文学の遅れと結びつけて論じられることがあるけれど、そうした問題までも想起させずにはおかない挿絵といえるのかもしれない。この《教育娯楽雑誌》は、そうした「良い子」の誕生に、一役も二役も買ったのだろうか？ いやいや、そうした予断にもとづいて、この雑誌を斜め読みするのはやめよう。むしろ、この際、たっぷりと時間をかけて、虚心坦懐に、ときに童心に帰りながら、紙面を追いかけていきたいものである。そうすれば、かならずや、新たな視座が、新たな発見が待ち受けているにちがいない。

子ども向けの本というのは、マンガでも雑誌でも、あるいは単行本でも、なかなか後世にまで残らない。たとえば、大正の終わりから昭和の初めにかけて出された、《世界童話大系》というシリーズがある(近代社刊)。「アラビアン・ナイト」は日夏耿之介訳でという、魅力たっぷりの人選で、ほかにも、米川正夫、青木正児、金田鬼一等、訳者は錚々たるメンバーだ。わたしは、この《世界童話大系》全23冊の揃いがないものかと、2年近く探したものの、結局見つけることができず、5冊ほどの欠本があるものを買って求めるしかなかった。この《教育娯楽雑誌》も、似たような事情かと思われる。Webcatで検索したところ、わが国の大学にはほとんど入っていないらしい。そうした意味でも、今回の復刻は快挙といえよう。この機会に、ぜひとも揃えることをお勧めしたい。そして、これをきっかけとして、ジュール・ヴェルヌだけではなく、エクトル・マロやエルクマン=シャトリアンといった、《教育娯楽雑誌》と縁の深い作家たちにも脚光が当たればいいのにと、願っている。

(五十音順に掲載)



第1期の主な執筆者と挿絵画家

■執筆者

P.-J. Stahl • Jules Verne • Jean Macé • Eugène Muller • Ferdinand de Gramont • Ernest Legouvé • Lucien Biart • Albert Genevray • Léon de Wailly • Victor de Laprade • Louis Ratisbonne • Gustave Droz • Albert Kaempfen • François Roulin • Maurice Block • Gaston Tissandier • Hector Malot • Jules Sandeau • Henri Sainte-Claire Deville • Eugène-Emmanuel Viollet-le-Duc • Ernest Van Bruyssel • Erckmann-Chatrion • Paul Verne • Prosper Mérimée • Théodore Lacordaire • Hippolyte Durand • Camille Flammarion • Élisée Reclus, etc.

■挿絵画家

Eugène Froment • Lorenz Frølich • Édouard Riou • George Fath • Jules Férat • Léon Benett • Clerget • Gérard Seguin • Édouard Moulinet • Émile Bayard • Yan Dargent • Edmond Yon • Théophile Schuler • Alphonse de Neuville • Jules Baric • Schuback • Alfred Quesnay de Beaurepaire • Henri de Montaut • Bertall • Félix Régamey • Valton • Ernest Griset • Grandville • Ernest Meissonier • Gavarni • Tony Johannot, etc.

興味深い記事・ストーリー (Tablesより抜粋)

■Éducation

Jean Macé: Les serveurs de l'estomac • Les animaux de Paris • Histoire d'un grain de blé (ill. **Baric**) • Fragments d'un voyage au pays de la grammaire • La France avant les Gaulois

Théodore Lacordaire: Sur l'histoire naturelle

Ernest Van Bruyssel: Histoire d'un aquarium et de ses habitants (ill. **Riou**) • Les clients d'un vieux poirier (ill. **Becker**)

Henri Sainte-Claire Deville: Air et eau • L'éclairage au gaz • Les lampes • Les lumières éblouissantes • Michel Faraday

Ernest Legouvé: Ce que coûte le bien-être qui nous entoure • Le travail et la douleur • Histoire de quarante mille francs

Eugène Muller: La jeunesse des hommes célèbres • La morale en action par l'histoire • L'homme dans ses rapports avec les animaux

Camille Flammarion: Les planètes Jupiter et Vénus (ill. **L. Kautz**)

Lucien Biart: Aventures d'un jeune naturaliste au Mexique (ill. **Benett**) • Causeries scientifiques

E. Foucou: Comment se nourrissent les hommes • Habitations de l'homme • Le vêtement de l'homme

A. Brachet: De l'élément celtique et de l'élément germanique dans la langue française

Élisée Reclus: Les fontaines • Le moulin • L'inondation

Maurice Block: Causeries économiques

Mortimer d'Ocagne: Les grandes écoles de France

Gaston Tissandier: Histoire de l'air (ill. **Jahandier, Hildibrand**)

Viollet-le-Duc: Histoire d'une maison (texte et ill.)

■Récréation

Jules Verne: Les Anglais au pôle nord (ill. **de Montaut, Riou**) • Le désert de glace (ill. **Riou**) • Les enfants du capitaine Grant (ill. **Riou**) • Vingt mille lieues sous les mers (ill. **Riou, de Neuville**) • Aventures de trois Russes et de trois Anglais dans l'Afrique australe (ill. **Férat**) • Le pays des fourrures (ill. **Férat, de Beaurepaire**) • L'île mystérieuse (ill. **Férat**)

P.-J. Stahl: La princesse Ilsée (ill. **Froment**) • Le nouveau Robinson suisse (Wyss, revu et traduit par Stahl & Muller; ill. **Yan Dargent**) • Petites sœurs et petites mamans (ill. **Frølich**) • Petites tragédies enfantines (ill. **Froment**) • Voyage de découvertes de M^{lle} Lili et de son cousin Lucien (ill. **Frølich**) • L'entrée au collège (ill. **Bertall**) • Une révolte dans un pensionnat de petites filles (ill. **Frølich**) • L'école buissonnière au village et ce qui s'en suit (ill. **Jundt**) • Histoire d'un âne et de deux jeunes filles (ill. **Schuler**)

Hector Malot: Aventures et mésaventures de Romain Calbris (ill. **Bayard**)

Albert Humbert: Le roi des pingouins – drame-bouffe (texte et ill.)

Jules Sandeau: La roche aux mouettes (ill. **Bayard, Férat**)

Erckmann-Chatrion: Le coquillage de l'oncle Bernard
La guerre pendant les vacances, par un vieux soldat (ill. **Bertall**)

Gaspard de Cherville: Mémoires d'un trop bon chien (ill. **Andrieu**)

本書の内容

- バルザックやユゴーなどのロマン派の巨匠たちの編集やジュール・ヴェルヌの発掘などで知られる、19世紀の代表的な編集者ピエール＝ジュール・エツツェルによって刊行された『教育娯楽雑誌』を復刻出版。
- 子どもの興味を刺激する形態で有用な知識をあたえていく、まさにタイトルどおりの「教育」と「娯楽」の融合を志向、押しつけ的な教育調の内容や、その反対に中身のない面白可笑しいだけの内容という、当時の子どもの読み物に多かったこの双方の性格からの脱却をめざした画期的な編集方針。
- 後にフランス教育連盟を結成する科学読み物の大家ジャン・マセ、「SFの父」ジュール・ヴェルヌが共同刊行者として参画、雑誌の理想を実現する重要な役割を担った。ヴェルヌ作品のほとんどが本誌初出であり、ヴェルヌ研究に必要不可欠な一次資料。
- 人気作家アンドレ・ローリー、ジュール・サンドー、エクトール・マロ、エルクマン＝シャトリアンなどの読み物も話題を呼ぶ。挿絵にも力が注がれ、ギュスターヴ・ドレ、グランヴィル、ベルタール、ジグー、ガヴァルニ、ジョアノなどの代表的な画家に加え、子どもを生き生きと描く挿絵画家フロモンやフロリッヒなども起用。挿絵研究の面でも重要な資料。
- 1864年の創刊号からエツツェル没年の1886年までを順次復刻刊行。

刊行計画

配本	巻数	原書刊年	ISBN	定価(本体)	刊行スケジュール
第1回	1-2	1864-1865	978-4-86340-005-4	95,000	2008年10月
	3-4	1865-1866			
第2回	5-6	1866-1867	978-4-86340-006-1	95,000	2009年 5月
	7-8	1867-1868 別冊解説 1			
第3回	9-10	1868-1869	978-4-86340-007-8	95,000	2010年 5月
	11-12	1869-1870			
第4回	13-14	1870-1871	978-4-86340-008-5	95,000	2011年 5月
	15-16	1872			
第5回	17-18	1873	978-4-86340-009-2	95,000	2012年 5月
	19-20	1874			
第6回	21-22	1875	978-4-86340-114-3	95,000	2013年 5月
	23-24	1876 別冊解説 2			
第7回	25-26	1877	978-4-86340-115-0	95,000	2014年 5月
	27-28	1878			
第8回	29-30	1879	978-4-86340-116-7	95,000	2015年 5月
	31-32	1880			
第9回	33-34	1881	978-4-86340-117-4	95,000	2016年 5月
	35-36	1882			
第10回	37-38	1883	978-4-86340-118-1	95,000	2017年 5月
	39-40	1884			
第11回	41-42	1885	978-4-86340-119-8	95,000	2018年 5月
	43-44	1886			

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】